

【曲目解説】

●歌劇「ドン・ジョヴァンニ」序曲（モーツァルト）

オペラ『ドン・ジョヴァンニ』は、ヨーロッパで広く言い伝えられてきた「ドン・ファン伝説」、すなわち「プレイボーイの貴族ドン・ファンが、貴族の娘を誘惑し、その父親（ドン・フェルナンド）を殺した。その後、墓場でドン・フェルナンドの石像の側を通りかかったとき、戯れにその石像を宴会に招待したところ、本当に石像の姿をした幽霊が現れ、大混乱になり、ドン・ファンは地獄に引き込まれる」という17世紀スペインの放蕩児、ドン・ファン・テノーリオの伝説をもとに劇作家ロレンツォ・ダ・ポンテが台本を書いたものです。

このオペラが初演された1787年はモーツァルトにとって精神的に重要な年で、無二の親友ハツフェルトの死にあい「死」という問題を真剣に考えるようになっていたところ、5月28日には父レオポルドが神に召され、大きな悲しみに沈みました。父の死を知って書いた作品が『ドン・ジョヴァンニ』であるといわれていますが、このオペラの筋書を心理学的に分析し、モーツァルトは自分のルーズな生活を死んだ父の亡霊によって罰したのだ、とする解釈がかなり有力です。映画「アマデウス」では、父レオポルドが登場するところで、この序曲の最初の和音が鳴っていたこともうなずけることです。

さて、『ドン・ジョヴァンニ』は、歌手の病気もあり紆余曲折を経て1787年10月29日にプラハの国民劇場で初演されましたが、この序曲は、27日から28日にかけての一夜に、モーツァルトはポンチを飲み、眠くなつては妻コンスタンツェにお伽噺をさせて、その話に、あるときは笑い、あるときは涙をこぼしながら書き上げたという有名な逸話が伝わっています。真偽のほどはわかりませんが。(K)

●ピアノ協奏曲第4番（ベートーフェン）

ベートーフェンは、1804年に交響曲第3番「英雄」を完成してから1809年までの間、立て続けにいわゆる「傑作」を作曲しています。交響曲第5番「運命」と第6番「田園」(1808)、ヴァイオリン協奏曲(1806)、ピアノ協奏曲第5番「皇帝」(1809)、ピアノ・ソナタ「熱情」(1806)などがこの時期の作品です。この協奏曲は、1806年に完成されています。交響曲において、軽快な第4番と堂々とした第5番が対比されるように、ピアノ協奏曲においても、第4番と第5番は、「女性的」、「男性的」という言葉でよく対比されます。

この頃の協奏曲は、通常、オーケストラのみの長い序奏に始まりますが、この曲では、冒頭からいきなりピアノが静かに主題を弾き出します。（これは第5番にも弾き継がれています。）このような協奏曲はベートーフェンが初めてではありませんが、当時としては画期的なことで、後のピアノ協奏曲の傑作（シューマン、グリーグ、チャイコフスキー、ラフマニノフなど）に影響を与えていることは事実です。

もう一つの特徴は、この曲の第1楽章の主題が「運命の動機」でできていることです。この曲は、「ターン、タ・タ・タ」という動機を持つ主題で始まりますが、これを逆さにすると「タ・タ・タ、ターン」という運命交響曲の動機になります。作曲時期が運命交響曲の直前であることを考えると、実験的な意味合いがあったのかもしれませんが、この動機は第1楽章の随所に出てきます。

この曲には特に愛称が付いていませんが、主題の動機が「運命」の逆さなので、筆者は「ピアノ協奏曲第4番『命運』」と呼んだらよいのではないかと思います。いかがでしょうか。

第1楽章 Allegro moderato ト長調 4/4 拍子 ピアノが「運命の動機」を弾き出し、オーケストラが応える。

第2楽章 Andante con moto ホ短調 2/2 拍子 ピアノに対してユニゾンの弦楽器が応える宗教的な音楽。

第3楽章 Rondo Vivace ト長調 2/4 拍子 軽快なロンド。後半では、ベートーフェンの曲では珍しく二つに分かれたヴィオラがロンド主題の変奏である優雅な旋律を奏でる。(鷹)

●交響曲第5番「宗教改革」(メンデルスゾーン)

この「5」と番号付けられた交響曲は、実際には有名な「スコットランド交響曲」、すなわち第3番の前に作曲されていますので、本来なら「第2番」と付けられるべきなのです。それが「第5」となったのは、作曲者の死後になって出版されたという事情です。元々この曲は、ルター派信仰の源泉「アウグスブルクの信仰告白」の300周年記念祭のために作曲されました。しかし、どうやら彼が「ユダヤ人」であるために、実行委員会が記念祭での演奏を認めなかったようです。

メンデルスゾーンの祖父、モーゼスは偉大な哲学者で、ドイツ人社会との融和を図りながらもユダヤ教信仰を捨てず、ユダヤ教もキリスト教も同じ一つの宗教、ユダヤ人もキリスト教徒も人間として同じ権利を持っていると主張し、多くの人の尊敬を集めます。しかし、時代は変化し、メンデルスゾーンの父、銀行家のアブラハムは、次第に高まるユダヤ排斥の機運の中、家族のユダヤ教からキリスト教ルター派への改宗をします。このことは、メンデルスゾーンのアイデンティティーに複雑な影を落とすことになります。

交響曲「宗教改革」が当時のキリスト教社会に受け入れられず、挫折を味わったメンデルスゾーンは、後年の傑作オラトリオ「聖パウロ」「エリア」、未完の「キリスト」によって、ユダヤ教、キリスト教の壁を超えた、人間の真実を描き出すことになります。(S)